

わがまち野毛

酒場日記から

多根雄一

〇月〇日

桜木町から野毛小路を歩いて最初の四ッ角に酒と食料品を売る「加藤商店」がある。四時頃、作業員風の数人の客が、早くも店の一角にある立ち呑みコーナーで呑んでいる。ここでツمامミを買って一杯やるのもいいが、もう少ししなツمامミが欲しいというむきには隣の「フライ屋」がある。店と店の間を利用した細長い簡易店舗で、通りにまで立ち呑み用のテーブルが置いてある。ニンニクやクジラなどのフライが一串、六〇円からで、オバサンが一人でやっている。床は油の浸み込んだニンニクの皮が散乱して

いてヌルヌルする。呑み過ぎたときには足元に注意しないとイケない。

店にはいると、一人の客がペロンペロンに酔っ払っていた。ひどく訛りのある言葉で、自分は寿に住んでいるという。いろいろ話しかけてくるのだが、訛りが激しいうえに、呂律が回らないので何を言っているのかよく解らない。こんなに酔っ払って忘れてしまいたいことが、おそらく日常的にうっ積しているのだから。こういう姿を見ていると胸が熱くなってくる。

この「フライ屋」の向い側には、銭湯の軒下を借りた通称「大学」という同じ

ような店があつて、労働者や一部のサラリーマンで賑わっていたのだが、最近なくなってしまった。「加藤商店」と二軒の「フライ屋」からはみ出した客が、路上いっばいに溢れていたことを考えると、ずい分と野毛も寂れてしまった感じがする。

この通りにはもう一軒、立ち呑みの店がある。「コップ酒のますや」だ。ノレンをくぐると愛想のよいオヤジがにこやかに迎えてくれる。ツمامミは一〇〇円から、ビールは二五〇円とかなり安い。

ここでも出稼ぎ労働者が話しかけてきた。呑んだ後は、ゴールデンセンターの

地下でゲームをやって帰るといふ話を聞き、異郷での淋しい生活が思いやられジンとしてしまう。

店を出て振り返ると、弱々しい後姿が目に入る。早く田舎に戻れるようにと心の中でつぶやき、人影の少なくなった野毛小路を駅に向う。

〇月〇日

都橋を渡るとそこから先が野毛である。本通りの中程を右に曲ったところが野毛小路で、日本酒、日本料理を中心とした店が並び、大衆的で和風の通りを形成している。

ここ数年、寒くなると抱きつきスリが横行しているようだが、この通りでも何回か被害者に会ったことがある。宴会が終わって二次会、三次会とついつい呑み過ぎてしまい、泥酔から醒めたときにはあとの祭り。サイフごとスリ取られていくというわけだ。

今日は給料前で金がない。こういふときは野毛小路の桜木町寄りにある屋台に限る。正確に言えば屋台ではなく、屋外の立ち呑み簡易店舗と言うべきだろう。学園祭の模擬店のようなものだ。

ここは酒が一一〇円、ビールが二七〇円でモツ焼(五本)が一二〇円とかなり安い。七〇円の焼酎を呑みながら客を見渡すと、ネクタイに背広という客は少なく、作業衣を着た労働者の多いが目立つ。よごれたタオルをハチ巻きにした港湾労働者、工場帰りの人達が押し黙ったままモツ焼をムシヤムシヤ食べている。酒を注文するとチケットを一枚つつ渡さ



れ、帰るときにその枚数と串の本数で料金を請求される仕組みになっている。

店の廻りを戸板で囲んではいないが、冷たい北風が絶え間なく吹き込んできて、コートのおそをハタハタとなびかせる。他の客達も「寒い寒い」と言いながら帰る気配もなく、ポケットに片手をつ突っ込んで足を踏み鳴らし呑んでいる。

とうの昔に折り目の消えたズボンにヨレヨレのジャンパーを着た隣の客が、焼酎とモツ焼の代金二〇〇円を置いて出ていった。カウンターに残された空のコップが、彼の苦しい家計やあまり運のよくなかったであろう人生を思い起させて胸が痛む。外に出ると、金属的な冷たい月が夜空に煌々と輝いていた。

〇月〇日

野毛小路の真中あたりで交差している通りに中央通りというのがある。寿司屋の多い野毛の中でも、ここには六軒とかなり多い。そのうちのひとつ「都寿司」が最近、鉄筋コンクリートのビルに改装された。この店に限らず、新・改装する店が野毛で増えているようだが、こうして一軒一軒の店が小さくきれいになっていくと町の雰囲気も変わってしまう。小さくてこぎたい店が必ずしもいいというわけではないけれど、建物と一緒に店の特色ま

でスクラップにしてしまうのは残念な気がする。

「都寿司」の近くに「波の上」という小さな店がある。琉球泡盛りを呑ませる店で、お世辞にもきれいな言葉はないが、赤い破れ提灯と狭い店造りが一種独特の情緒を感じさせる。

今日も店内は満員で、少しづつ詰めてもらってやっと座れた。豚のシッポと耳を注文し、壁を見ると「琉球泡盛りの由来」が書いてある。約四百年前、沖繩でシヤム米を原料にして作られ、泡の具合でアルコール度数を計ったので泡盛という名前がつけられたそう。

「シッポ」と「耳」がカウンターの上に並べられた。この豚の耳は千切りにしてあり、皿の中で並べると元の耳の型にもどるような気がする。これをコリコリと噛みながら、四十五度の泡盛をグイと呑む。強い酒なので水を飲まなくては行かない。かつてこの店と一緒に来た友人が、シッポと耳を食べるとすぐ表に飛び出し、電柱の陰でゲーゲー吐いてしまった。強い酒のせいもあったのだろうが、やはり原型をとどめている豚の一部が気分を悪くさせたようだ。しかし慣れてしまえば、こんな美味いものはない。

この店のオバサンは一見不愛想な感じがするけれど、意外と博識で気さくなと

ころもある。これも慣れてしまえばいい店だ。

〇月〇日

都橋を渡って野毛本通りを野毛山方面に歩き、野毛小路の一本前の小径を右に曲ると、小さなバーや一杯呑み屋がちらちらと見えてくる。他の通りと比べて道幅が狭く、同じような店が集まっているので、ここだけで小さな呑み屋街を形成している感じがする。通りの端から眺めると、なんとも佻しいネオンが並んでいて、場末の酒場という感じなのである。

どの店もこじんまりとしており、寄りかかるそのまま倒れてしまえばいい、いかにも映画のセットのようなたたずまいが、ことさらうらぶれた感じを強くしている。「すずえ」もその中の一軒であり、小料理の看板をかがけてはいるものの、実際はおでんと湯豆腐の大众的な店である。

六人ほど座ることのできるL字型のカウンターの中に、大阪出身のおかみがついて客相手に話をしている。隣の店ではジュウキボックスでもかけているのか、テナーサクスの甘い切ないメロディーがベニヤ板の壁を突き破って聞こえてくる。外では酔客がけんかをし、ガラスの割れる音が聞こえる。こういった音がこの通りの存在感をさらに強めているよう

〇月〇日

伊勢佐木あたりに 灯がともる
恋と情けの……灯がともる

ザキ裏の福富町は今夜もネオンが明るい。あたり構わずわめき散らしている酔漢、キャバレーの客引きを振り切って家路を急ぐサラリーマン、面白い店はないかと物色しているグループなど、ひと頃と比べればかなり人影が多い。

「社長ノ二三〇〇円だよ。かわいい娘ちゃんとパッチリノどう？」

「一時間、三〇〇〇円ノ飲み放題、やり放題、美人揃いだよ」

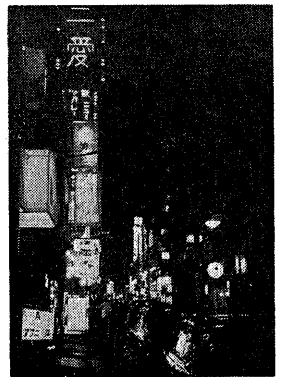
町を通り抜ける間に、十人くらいの呼び込みの声かけられる。なかには

「社長、お待ちしました」

と腕を取って店内に引っばろうとする者もいる。身体に触れる呼び込みは違反のはずだが、同業者が多いためか、ついエスカレートしてしまうようだ。

激しいリズムの音楽とホステスの嬌声が充滿した薄暗い店内では、今夜も男たちがビール一本に何千円も払って、ホステスの股間をまさぐっているのだろう。

店を出た後、空しい思いをするのは分かっていても止められない男たちの悲しい習性なのか。だが、おしぼりを使って客の股間を刺激している女たちはさらに哀れな存在だろう。



この周辺には「ボン引き」もかなり多い。今夜も街角に立っている男が寄ってきて

「もうお帰りですか。いい娘がいるんですが、どうですか。Tデパートの女で、この先のマンションに居ますから、さあ、どうぞ」と声をかけてきた。昨日は東南アジアの女を紹介するというボン引きがいたし、「マツチ売りの少女」という女もいる。華やかなネオン街の裏では、一体どのようなことが行われているのか、どのような組織になっているのか、興味のつきない町だ。

福富町のはずれに「エイトセンター」という雑居ビルがある。「桜木デパート」から移転してきた店が多く、その中の一軒「美津野屋」で呑む。バアさんが一人でやっていて、値段が安い。キャバレーと違って、性的興奮など得られようもないが、安心して呑める良心的な店だ。水割りを呑みながら、キャバレーのおしぼりと喫茶店とは流通ルートが別に

なっているのだろうかと考え込んでしまった。

〇月〇日

華やかな福富町のネオン街を通り抜け、宮川橋を渡ると急に暗くなる。右側には大岡川に添って「野毛都橋商店街」というビルがある。かつて野毛の名物だった露店が撤去されてここに入居している。一階は靴屋、衣料品店、二階はバー・酒場で、どれも似たような店である。客の中には昔からの常連も多いようだ。

橋を渡って宮川橋通りを進むと「くら屋」という店がある。外との境がない、半分屋台のような店だ。酒の肴にはその名の通りクジラを食わせてくれる。

「これからはクジラが手にはいりにくくなるので大変だろう」と聞くと

「そうですね」とあまり気にもしていない様子。

おやじとしばらく話をしていると、港湾作業員らしい客が四、五人やってきてオデンを注文した。皿を持って出ると路上に置いてある長イスに腰かけ、隣りの酒屋で買ったビールで宴会が始まった。こんなところがいかに野毛らしい。野毛は大衆的な町だとよく言われるが、ホワイトカラーの多い店と、ブルーカーラーの多い店とがあって、一種の二重構造になっている。この店は野毛の縮図

だ。

カウンターの端で呑んでいた一人の客が話しかけてきた。自分は会社のために二十数年間、一生懸命に働いてきたのに、給料はこれっぽっちしかないし、近々、娘が嫁に行くので出費がかさんで大変だという。黙ってうなずいていると、会社や上司に対する愚痴が次々と出てくる。どうもこういうのは苦手なので、頃合いを見計らって外に出た。

今の話を思い出しながらネオンの間を歩いていると、なんともいいようのない淋しさが襲ってきた。

のようなものだ。

最近までこの店は屋台だった。屋台時代は客の間で「競馬屋」と呼ばれていた。おやじが馬ていのお守を売ったり、競馬が好きだったので自然とそういう名前がついたのだから。

夏になるとゲイのアイスクリーム屋が「あーあ、全然売れないの、いやんなっちゃうわ」

と嘆きながらよく立ち寄ったものだ。ゲイバーならめずらしくもないが、リヤカーを引っ張ってアイスクリームを売っているのを見て驚いたのを覚えている。

冷たい風が店の中に直接入ってくるので、そろそろ引きあげることにする。港湾作業員の宴会はまだ続いている。

〇月〇日

県道平戸桜木町線から小便横丁を通り抜ける時駅前仲通りに出る。この小便横丁というのは、酔っ払いがところ構わず立ち小便をするのでこの名前がつけられた。二十メートル足らずの横丁だが、薄暗くて異様なニオイが漂っている。ここ

を通るときは、入口で一度大きく息を吸い込んでから一気に通り抜けなければならない。

駅前仲通りは桜木町から日の出町まで続いているが、野毛本通りを挟んで、桜木町方面は日本酒を中心とした店が並んで明るい対し、日の出町側は店もまばらで薄暗い。この通りのはずれに「京浜ミュージック劇場」があったのだが、最近、「港ミュージック」に続いてなくなってしまった。これで野毛・福富町界限からストリップの灯が消えてしまったわけで、残念な気がしてならない。

桜木町から駅前仲通りを百メートル程はいったところに「富士見屋」という店がある。今日は久しぶりにこの店を訪ずれた。しばらく来ないうちに少し改築したようだ。以前はガラスに張った障子紙と木の窓わくが印象的で、昭和初期の食堂を思わせたものだが、今ではアルミサッシの窓になってしまいい哀愁が余り感じられない。

民家を改造したような店内には、古い机の上に炬燵板を置いただけのテーブルと三畳ほどの座敷がある。この座敷はか

つて居間だったに違いない。戸棚や飾り棚そして障子戸の敷居がその名残をとどめている。看板にもあるように「家庭的な店」で、こうして煮物などを食べていると、どこかの家の台所にいるような気がしてくる。

改築して店は少しばかり美しくなったが、家庭的な雰囲気はまだまだ残っていたのでうれしかった。

〇月〇日

野毛本通りと中央通りの間に柳通りがある。道の両側に植えてある柳と、提灯をいくつもぶら下げたアーチがこの通りに趣きを添えている。西からはいって少し歩くと左側に、小さなバー小料理屋が十一軒並んだ「たべもの横丁」がある。ここで一杯やっていこうと思ったが持ち合わせが九五〇円しかない。ポケットの裏を返しても出てくるのはホコリだけ。「仕方がない。これで呑める店へ行こう」とそのまま進むと、つきあたりに酒蔵「相模」という店があった。ビールの値段を見ると二五〇円と書いてある。これなら大丈夫だ。

民家の玄関のような戸を開けて店内に

はいると、農家の土間を改造したような内装である。奥には障子戸を閉めきった座敷があって、縁側とひさしが付いている。一瞬、家の中はもう一軒、家があるような錯覚におちいってしまう。壁、窓便所、どれもがみんな古めかしく、ノスタルジアを感じさせる。

競馬婦りの客と雑談しながら一本呑んで外に出ると、もう一軒寄って行きたくなった。残りの金を考えると同じ通りの「若葉」しかない。

この店は安さとエネルギーなどころに魅力がある。三十人以上は座れそうなテーブルを港婦りの労働者が囲み、一生懸命に話している。しかし、何を喋っているのかは分からない。店内は話し声が充満し、ウォーンとしている。まるで空気が圧縮されているようだ。

この熱気、活力が野毛という街自体にあればいいのだが……。

残りの金を全部はたいもう一本呑み、外に出ると、まだ宵の口というのに人影が少ない。やはり野毛は寂れたという印象が強い。

〈都市科学研究室〉